世阿弥研究会　簡易記録（2019.11．26）＠河村能舞台18:00～20:00

配布資料・能楽情報

1. 片山定期能　十に月講演　：京都観世会館：12月22日（日）午後1時開演（12:30会場）

能「邯鄲」片山九郎右衛門　　狂言「腹不立」茂山七五三　能「正尊」（起請文翔入）味方玄

1. 京都観世会館会報誌　738号　令和元年11月号

巻頭言：出岡宏「こんな能をみてみたい」

（被災地での幻想か。被災地を訪れた諸国一見の僧侶の読経の前に、一人の老人が現れ、悲惨な津波大地震について語る・・）以下は後半の抜粋

**「シテは土地の神だろうか。修羅になりそうな＊＊をしかし抑えて、人の営みの激しさの中で忘却された悲しみと、巨大な変動に襲われて土地の衆生を守れなかった悲しみを語る。シテの背後にはさ様々に傷ついたツレが無数に伴われている、シテの傍らには子方もいる。子方は災害によって失われた子どもたちであり、再生しつつある土地の神でもある。**

**ワキの前で、後シテが昔を思って舞うにつれ、被災する前の、人間が自然と縁を切ろうとする前の女川の、各地の被災地の、かつての姿が、そして、かつて暮らした人々の暮らしと笑いがよみがえってくる。シテが両手を広げ、その胸にそれらを抱きしめようとシオルとき、私たちは、私たちが本当に望んでいることの一端を思い出す。その時、土地の自然とそこに生きている神仏と和した私たちの暮らしも思い出されるならば、この能は悲劇の能ではなく、私たちの暮らしを見守る祝言の能へと育っていくだろう。）**

1. 河村博重先生講義資料：世阿弥紹介・楽器紹介・白洲正子「能の醍醐味」・「高砂」「葵上」謡譜・能の題材とテキスト「本説（能の脚本の典拠となっる文学作品）」・観阿弥・世阿弥が大成した能（面・夢幻能・神男女鬼・シテ）

ゲスト紹介

稲葉総一郎さん

三澤史明さんの大学時代からの友人で音楽関係のお仕事、現在フリーのようです。音楽・哲学・ヒップホップ・オカルトなど関心は様々、ベルリンで神秘体験。ちょうどグリーフケアの本を読んでいる時に三澤さんからご連絡があり、そのシンクロを感じて本日は天河詣の後、京都にきて研究会に出席。

本日の読解（「曲付次第」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・世阿弥能楽論集　編訳：小西甚一）

1. しかれば、謡ひ出す声先に口伝あり・・・・・・・・・・・・・・・・・pp.252－253
2. 秘して云はく、「ただ音曲の至道には和歌の言葉を取り合わせて」・・・・pp.254

　　３．およそ、音曲の連声は、流水の地体に従って行くがごとし・・・・・・・pp.255－256

**読解１．しかれば、謡ひ出す声先に口伝あり**

1. 息を「盗む」

だいたい、息をつぐのは、句の間でするが、そのなかでも、また、所により息を盗んでつぐ場合があろう。

「盗む」とは、息をつぐと感じさせないところをいう。

1. 息はついでも『気』を切らない

「切って待つ拍子の間に、語音は切りながらも息を切らない場合があろう。また息はついでも『気』を切らない場合があろう」といわれる。

1. 息をついでゆけ、息につがれてはいけない

息は謡ぜんたいを成立させていく基本。息つぎに配慮して作曲する・・・・理法にかなった作曲。

　ディスカッション

　　謡・・・・口伝である。

　口からでなく鼻から息つぎ

実演（河村）「井筒」「むかしおとこのな

実演（鎌田）祝詞「かけまくも・・・

　　神主が神の言葉をうけて「のる」→人々に伝える→形式化→装飾化

全体の情報が切れないように・・・ヒップホップと同じでは

言葉の入れ方・切り方

「息はついでも気（機）は切るな」

　　　気・・・エネルギー

　　　機・・・単なるエネルギーではなくタイミングのようなもの

　時間の系列をうまく掌握する

　講演も同じ・・・切れ目を上手くいれないと意味が平板になってしまう。

能はまさに「気（機）の音楽」

　　　地謡の気（機）

地頭に合わせて　8人の内、後ろの2人の気（機）

囃子の気（機）　打つ「間」（いよ――――）打つ（ポン）

シテの気（機）

ヒップホップとの比較

　サイファー：円形でラップ・・・ラップを紡いでいく（完璧に即興）

　　　　　　　気（機）を読むタイミング・差し込むタイミング（言葉の意味に反応orストンと落ちた時）

　　　　　　　流れが上手くいくとポンポンと出て来る

グルーブ：全体のグループ間　上手い奴と下手な奴・・・呼吸のタイミング

　　　　　　　　　　　　　　歌詞の内容（文学的な軸・音楽的な軸）

連歌・連句との共通性

　　　５７５・７７で巻いていく連歌空間・・・つき過ぎず、離れ過ぎず

座の芸能

　シテ＋ワキ（補う地謡＋囃子）・諸国一見の僧（ラッパー）

　地謡は土地が語る

　ワキはひた面（面をつけない）そしてカウンセラー（ディープ・リスニング）

　　　ワキ方の安田さんが面白いことを書いている（吸血鬼だと夕方から夜に出て来て明け方に帰っていく）

　ラッパーと合わせるリズム

　実演：モンゴルの喧嘩歌（アルタンさん）

　　　　二人の掛け合い、民間の口承伝承

わらべうたにも共通する

ノンセンスな言葉遊び　inimini makaraka haikai dominaka（ヨーロッパ圏共通のライム）

方言を大切にする

　アクセント（奈良と東京では「く・も」の行程が逆）

祝詞のリズム・・・声明と類似（一音の最後を長く伸ばす・・意味を解体させる）

　　　　　　　　　意味としてでなく、声を楽器として使っている

　　　　　　　　　響きで相手の身体に沿っていく

ヒップホップ：言葉にノックアウトされる

響き：言葉を極力排除して心の奥に入って行く

能は？

　言葉的な部分・意味と似た部分

　祈りと鎮魂・・・特に「翁」ワキが土地の聖霊を呼び出す　囃子だけで感動する

　能は7・5調に８拍　前半ゆっくり（大かわ）後半ははやく（小鼓）・笛は感情・太鼓は時を刻んでいる

　指揮者はいない

TV・NHK大河ドラマ「いだてん〜東京オリムピック噺」の記者会見の場面

割って入る絶妙さ・・・流れを変える

理性的な善悪の判断を超えた芸人が持っている奥行

**読解２　秘して云はく、「ただ音曲の至道には和歌の言葉を取り合わせて**

1. 和歌の用語を綴りあわせ詞章を作る

5・75・・・という謡曲詞章の標準形式が基

和歌は言葉の「しらべ」を基本として詠む音声的表現であるから、表現原理に反してはいない。

アクセントにおいても正しい。

謡いに適合している

和歌に節づけしてうたてみると音曲としての趣をそこなうことはない。

1. 発音と節の関係

節がアクセントとは少し合わなくても謡としての「しらべ」にはうまく乗る場合がある。

「便音（びんおん）」：アクセントが少し合わなくてもうたっていゆく「曲」の模様が「しらべ」にひかれて聞いた感じが優美流麗なのは不可とすべきでない。

1. 軽重や清濁は上からの続きぐあいによる

ディスカッション２

　　和歌を上手くつないでゆく

　　　　定型的なものは基礎になる

ヒップホップ・・・・・・サンプリング：ことわざ・時事の言葉

　　　　　　　　　　　　ex.　「貧乏暇なし」

　　　　　　　　　　　　　　「昨日の敵は今日の友」→「昨日の友は今日の敵」

　　　　　　　　　　　　正句をひにくる・先輩のラッパーの言葉を変化させるなど

本歌取り・・・・・・・・「マタイの受難曲」は「イタリアの歌謡曲」を入れ込んである

能の題材とテキスト（配布資料）

古事記・日本書紀・風土記・万葉集・古今集・後撰集・拾遺集・山家集・伊勢物語・大和物語・源氏物語・今昔物語・宇治拾遺物語・古今著聞集・撰集抄・袖中抄・平家物語・太平記・義経記・曽我物語

（本説として用いたテキストは、かならずしも原作そのものではない）

能：くしゃみ→くっさめ・・・和泉式部を上手く取り込んでいる。

　座の文化（掛け合い）

　　　　サイファー

　　　　　フリースタイル（言葉の化学反応・かけあい・言い換え）

　　　　　ショー（曲をつくる）・・・自分の世界に落とし込んで

　　　　平家物語（みんなが知っている）の事件を引用

　　　　　叙事詩・抒情詩に世の無常、悲しみを慰めて行く

中島みゆきや「イエロー・モンキー」の吉井和哉ロビンソン・・・センチメンタル・情念の世界

「井筒」はユーミン

　なぐさめる歌・泣き歌

　　　　アイルランド、アラン島（ゲール語）、キール

　　　　奄美大島・・朝崎さん・はじめちとせ・コッコ・・・沖縄の歌唱の力

　　　　ロシアのおばあさん

　土地の力

　　　　みかみか人・秋田弁・友川かずき

**読解３　音曲の連声は、流水の地体に従って行くがごとし・・・声は水、「曲」は流れ**

1. 謡をうたってゆくのは、水が土地の状態に順応して流れるようなものである。
2. 平地を流れる水・土や石のごろついているところ、曲がりくねる・渦をなし・小さな波・坂巻・・・

ついには順当な流れに。

1. うたい方の本格的なのは聞いた感じが優美なものだ
2. 句の長短・発音の不ぞろい・・・うたわれぐあいが「あや」をもち、
3. 音声の「文字移り」がいわゆる五音連声のような調声法に適合しているならば、曲がりくねる水が河底の状態に順応して流れてゆくおと同様
4. 不適合：平地に立つはずのない水・庭にたまった雨水・・・やがては無くなり流れも絶える
5. 鴨長明「それ、行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にはあらず」

声は水、「曲」は流れ・・・「絶えずして、しかも、もとの声にあらぬ」

1. **水簾水錦の景色、庭前の面影、ことごとく水体を作りさせるは、これ曲付けなり。**

庭のありさまを水じたてにするのは、すなわち作曲の要領なのである。

1. 一音・一字の響きも音声法則・アクセントという地形が**適正な道を得なければ、声の流れは断絶する。**

　ディスカッション３

　　作曲法

　　声）水の魅力・・・水自体が綺麗であること

　　曲）流れを上手く緩急つけて

　　五音連声：ありすが・のし・・・

　　歌学：二条良基

　　　　　歌病についても

　　　　　古今和歌集・・・新しい時代の印象

　　　　　折口信夫は京風派・・・冷泉家は相国寺（藤原定家の墓がある）の近く

次回の予定：12月24日（火）＠河村能舞台　18:00～20:00

|  |
| --- |
| 次回は、クリスマスイブの夜の開催になります。  12月24日（火）18時～20時、読むテキストは、この前に「曲附次第」を全部読み終えたので、その次の「風曲集」（小西甚一編訳『世阿弥能楽論集』257頁から）です。  ご参会を楽しみにしています。    11・29　鎌田東二拝 |

記録・文責：木村はるみ